

或るスルタンがいて、彼は魔術師を抱えていた。奥方はその魔術師をととも買っていたが、スルタンは同意しかねた。スルタンにはナフィッサという友人がいて、魔術師見習いだった。彼はスルタンの家族から恐れられていた。

或る日、お妃の宝石類が厨房に埋められた。魔術師が呼ばれて彼は言った。「宝石は暗いところにあり、見つけるのは難しいでしょう」。スルタンはナフィッサを呼ぶように命じた。魔術師は、彼は無知であるからと言って呼ぶことに反対した。ナフィッサが着き、香を焚き、書字板を取って言った。「宝石は厨房の中にあり、焜炉の中に隠されています」。魔術師はナフィッサの知識が信じられなかった。スルタンは、結局どちらが優れているかを知るために競技をすることを決めた。魔術師はそれを聞いて妻と一緒に逃げようとした。というのも、彼は実際にはペテン師だったからである。彼は言った。「出て行こう。そうしないと、牢獄に入れられるか、殺されてしまう」。魔術師は、1 トンの衣類を担いで家を離れた。彼はパン屋に入って、食いつなぐための多くのプチ・パンを買った。店を出る時にスルタンの衛兵が彼を見つけ、スルタンの許に彼を連れて行った。スルタンは彼に言った。

「どちらがより精通しているかを見るために、二人を試すことに決めた」。魔術師は、蓋をした皿を持って来させ、蓋を取るとよく焼けた肉が現れた。ナフィッサの番が来て、彼は香木を持って来るよう頼み、祈祷を始め、魔術師の衣服の下に隠れていたパンを落とす。しかし、お妃はまだナフィッサの知識に納得しなかった。

この試演の後、魔術師は妻に言った。「本当に、まずいことにならないうちに出て行かなければならない」。彼らは出発するために荷物をまとめた。魔術師は妻を屋根に上らせ、星を数えるように言った。「7 つまで数えたら私に言いなさい。その時が出発する時刻だ」。そうするうちに、泥棒たちがスルタンの家に忍び込み、金の壺を7 つ盗んだ。彼らは魔術師の妻がいた同じ場所で[壺を]数え始めた。彼らは 7 つまで数えた。数えるのを聞いていた魔術師は、出発する時なので、妻に[屋根から]下りるように言った。その間に、ナフィッサは泥棒たちの隠し場所を見た。

スルタンは盗みに入られたことがわかり、二人の魔術師を呼び出して、どちらが金の壺を見つけられるかを知ろうとした。魔術師が祈祷を始め、言った。「私には金の壺が隠された場所を見つけることは出来ません」。ナフィッサの番になり、彼は香を焚いてから言った。「壺は 7 つあり、どこに隠されたかわかります」。

スルタンの妻は、相変わらずナフィッサを優れた魔術師とは認めておらず、ある時彼女のところに招待した。その村では、毎晩 20 時頃になるとライオンが人里まで出てきて、人々を食べていた。20 時頃、スルタンの妻は夫に言った。「あなたのお友だちが帰る時間になりました。結婚している人なので、奥さんを心配させるようなこと

があつてはいけません」。

ところで、彼女はナフィッサがライオンに食べられることを期待していたのだった。ナフィッサとライオンは明け方まで戦い、最後にはライオンが逃げた。しかしナフィッサはその戦いの中で傷を負った。スルタンはナフィッサの手当てを引き受け、妻に言った。

「ほら、ナフィッサこそ真の魔術師だ。彼は村のライオンを隣人たちから追いやった」。

ナフィッサはずっとスルタンの寵愛を受け、最後には非常な金持ちになった。